4 連想の場としての本の世界

Speaker Profile

たかの　あきひこ
高野 明彦 Akihiko Takano　国立情報学研究所教授

1980年東京大学理学部数学科卒業。同年(株)日立製作所入社。同社基礎研究所主任研究員、オランダ国立研究所CWI客員研究員、中央研究所主任研究員などを経て、2001年より国立情報学研究所教授。博士(理学)。2002年より東京大学大学院情報理工学系研究科教授(併任)。専門は、関数プログラミング、プログラム変換、連想の情報学。研究成果のGETAを活用して、Webcat Plusや新書マップなど「連想する情報サービス」の構築に情熱を燃やしている。

- Webcat Plus　http://webcatplus.nii.ac.jp/
- 文化遺産オンライン　http://bunka.nii.ac.jp/
- 新書マップ　http://shinshomap.info/

Abstract

インターネットを始めとする情報技術の普及により、我々が日常的に利用できる情報量は飛躍的に増大した。GoogleやAmazonのプロジェクトが進めば、数百万冊の本の中身にまで電子的な検索が届き、いつでもどこでもアクセスできるようになるという。しかし、そこから意味のある情報を汲み取るための情報技術は、せいぜいメタデータによる紋切り型の検索や全文検索であり、自分が直面する問題解決のヒントや、自分の思考を深めるのに役立つ示唆はなかなか得られない。21世紀に求められる情報技術とは、膨大な情報を活用して個人やグループの問題解決能力を高め、思考や議論を深めるものでなければならない。

我々はこれらの課題に「連想の情報学」という観点からアプローチする。人間の創造性を高める情報技術のカギは、脳内の記憶の連想的探索・無意識的想起と、情報空間における関連情報の探索・分析・提示との新しい結びつきに求められる。自分の脳に蓄えられた情報(知)に基づいて思考する人間を、外部の膨大な情報と創造的に相互作用させるには、人間の連想能力の活性化が不可欠である。電子化された本の世界を、我々が連想にまかせて自在に探索できるようになったとき、新しい本の姿が見えてくると確信している。